

それぞれの家で灯笼とうろうをつくり、送り盆の日に川や海に流す灯笼流しは、お盆で迎えた亡き人と別れる行事です。

「流燈りゅうとうや 一つにはかに さかのぼる」

これは、大正・昭和期に活躍した俳人飯田蛇笏いいただこつが、灯笼流しの情景を詠んだ句です。流れていく無数の灯笼のうちの一つが、突然さかのぼった一瞬を、蛇笏だこつはとらえました。「さかのぼる」という描写に、亡き人と別れたくないという、万感の思いを読みとることができます。

灯笼から手を離す瞬間は、亡き人を思い切るという時です。でも、思い切りたくない、しかし思い切らなければならないという、正反対の思いがあふれるのでしょう。

大切な人を思い切らなければ、いつまでもその人への思いがつのるばかりです。しかし、亡き人はもう帰ってこない。泣いても叫んでも、以前のように、笑いあい、語り合い、触れあうことはできないのです。そうであるならば、私たちは、大切な人との関わりを、新たにつくりあげていく必要があります。

たとえるなら、これまで、一緒に手をつないで同じ道を歩いてきたその人と、手をつなぎなおすということです。もう二度と以前と同じように手をつなぐことはできません。手をつなぎ続けたいと思うのではなく、亡き人を生きる力とするような、手をつなぎ方に変えていくのです。

手をつなぎなおすには、一度手を離さなければなりません。一度手を離すとは、その人を思い切ること、その人の死を、真に受け容れるということです。

灯笼流しには、このような思いが込められているのだと思います。

灯笼を流すということは、その人の死を受け容れることであると同時に、大切な人との新たな関わりのはじまりだということができます。

飯田蛇笏いいただこつが、亡き人を思い切ろうとして流した灯笼が不意にさかのぼった情景に、思わず別れたくないという思いをかみしめたように、その人の死を受け容れ、新たな関わりをつくりはじめることは、簡単にできることではありません。私たちの心は、行ったり来たりしてしまうものです。

しかし、灯笼が行ったり来たりしながらも、川の流れに沿ってひとつの方向へ進んでいくように、この心の営みを、ゆっくりと誠実に続けていきたいものです。